

温熱化学放射線療法により 5 年 3 カ月生存中の stage I 膵癌の 1 例

社会医療法人財団白十字会佐世保中央病院

放射線科 平尾幸一、堀上謙作、末吉真

臨床工学部 中島喜代子、上原かをる、中山絵美

関谷光彬、森田晃平、川中温美

長崎大学病院

放射線科 山崎拓也

【症例】

60 代男性。2011 年 4 月、住民健診を契機に、膵頭部に計 1.5cm 大の膵癌 (cT1N0M0、JPS stage I、UICC 分類 stage I a) が見付き、同年 5 月より術前照射 (10MVX 線 50Gy/25fr、4 門) を行った。放射線治療中は Thermotron RF-8 による加温を週 1 回、計 4 回行い、TS-1 および GEM を併用した。放射線治療終了後に、計 5 回の温熱化学療法 (GEM 併用) を 2 週に 1 回行い、同年 9 月外科的手術を試みたが、放射線治療に伴う線維化が高度で試験開腹に終わった。同年 10 月より、温熱化学療法 (GEM 併用) を 2 週に 1 回のペースで計 23 回行い (途中腰痛のため半年間化学療法のみ実施)、温熱化学放射線療法開始から 2 年 3 か月後の造影 CT で腫瘍を指摘できなくなったため、患者の希望によりすべての治療を終了した。しかし、更に 1 年 8 か月後に再発し、TS-1、その後 GEM と nab-PTX による温熱化学療法を 2 週に 1 回のペースで計 24 回行った。現在、門脈閉塞による肝不全の状態となったが、治療開始から 5 年 3 カ月経過した現在も生存中である。

早期膵癌でも外科的治療が困難な場合、ハイパーサーミアを用いた集学的治療が極めて有効であることが強く示唆され症例であり、文献的考察を含めて報告する。